



読売俳壇

矢島 渚男 選

西瓜探るラグビーのごとくパスつなぎ

【評】西瓜畑で、たくさんの人たちが西瓜をポンポンと投げては受け取り、トラックまで運んでいた。まるで折からのラグビーのようだ。面白い光景で見たくなる。
荒ぶるや火の粉も人も筒花火

【評】プロの花火師の上げる花火ではなく伝統の手作り花火。かなり太い筒を手を持って火をつける。火の粉をかぶりながら勇壮なものだ。
新涼に赤提灯の灯りけり

松山市 高山 洋子
【評】これは淡々とした景色である。この頃は仕事帰りと日暮れの時間が重なってきて、庶民的飲み屋の赤提灯に灯が入り誘惑する。
飛び入りて水かけ神輿清め水
立川市 五百蔵英子
空蟬よ脱皮に痛みありますか
山形県 沼沢さとみ
衣服みな脂にまみれて煙草干す
東京都 松永 京子
流灯に平和の文字の次々と
宇都宮市 大門とよ子
中空に上弦の月処暑の雲
羽村市 竹田 元子
黒猫と共に街行く夏の夜
奈良市 浦城 亮祐
終戦日夢に焼かれた日記帳
宇都宮市 吉田 宏

宇多喜代子 選

同じこと何度も思ふ夜長かな

【評】まず、こんなことわたしにもあるある、と思わせる句だ。秋の夜長、考えても考えても埒が明かないことをまた考える。
揚花火水面に写り水に消ゆ

【評】揚げ花火を見上げているはずの作者の視線は下に向いている。天上の花火ならぬ水面に写った花火を見ている。そんな視点がおもしろい。美しい残暑の匂ひ過疎の村

【評】残暑を美しいと見た句。滅びゆくものの美しさか。村人の少ない過疎の村もまた衰退の美しさを見せている。盛夏のあとの村の竹まいである。
野の草も野に吹く風も秋めいて
神戸市 高橋 和郎
秋の浜少年と犬点景に
武蔵野市 相坂 康
稲架続く鳥海山の裾野かな
日南市 宮田 隆雄
右左行ったり来たり赤とんぼ
横浜市 井上 誠一
伍蹴りの夕焼とともに終りけり
土浦市 今泉 準一
秋麗ガラスの海洋博物館
神戸市 吉野 勝子
初秋や空き家に猫の通ひみち
浜松市 木通 佳子

正木ゆう子 選

ふたりただミルクの膜を掬ふ秋

【評】話をするでもなく、ちよっと温めすぎた朝の牛乳の膜を掬う。各々のカップに膜が張っているのは、電子レンジで温めたからか。つまりなそうで、幸せそうな句だ。
絵みたいな入道雲よ友の死よ

【評】あつけらかんとした表現に、まさか・うそ・信じられない、といった気持が、逆説のように滲み出ている。言葉とは不思議なものである。団扇手に大団円の自給論

【評】冷房じゃなくて、団扇。それでも湧ける緑豊かな地なのだ。自給自足という夢を語り合えば、広がる明日。既に実現している作者はとうとう。緑児のむんず馬追見せに來ぬ
相模原市 荒井 篤
おそろくは真夜中に咲く曼珠沙華
たつの市 七條 章子
妻と言ふ不思議な人と今年酒
加古川市 東田 強
ありがともさよならもなき星月夜
松山市 島田 忠巳
カマキリのあれっ何だっけという素振り
南房総市 山根 徳一
育てたる時計草の裏召し上げられ
下田市 森本 幸平
おはやうの声新涼の高さあり
上尾市 中野 博夫

小澤 實 選

地に足が吸ひ込まれゆく秋の暮

【評】秋の夕暮れの闇の到来の速さ、闇の濃さを、足という身体の一部を通して、みごとに表現している。たしかに、秋の暮とは、ある意味恐ろしい時間である。
電話詐欺見破る妻や秋涼し

【評】お手柄の妻である。もし作者が電話に出ていたら、だまされていたかもしれない。「秋涼し」に妻を讃える思いがひそんでいる。
外来の藻のはびこれる秋暑かな

【評】秋になっても暑さが続き、池には藻が繁茂している。それも外来の藻であるというのが、さらに暑苦しさを感ぜさせるのだ。
つくづくと己が蹴を眺めけり
東京都 杉中 元敏
秋風や牧羊犬は長毛種
対馬市 神宮 斉之
録画みな消してテレビや涼新た
海老名市 山田 山人
終戦日吾にも戦闘帽時代
東京都 望月 清彦
秋出水ねずみが泳ぐ通し土間
名古屋市 可知 豊親
落鮎の腹子とびだす炭火かな
津市 中山 道春
誕生も死もこの茶の間祖父の秋
宝塚市 藤田 晋一